

# 令和2年度「英語指導力向上事業」～福島県立葵高等学校～

## 現状の課題

長文読解に難しさを感じている生徒が多い。(特に「時間内に読み切れない」「単語の意味が分からない」といった声がよく聞かれる。)  
また、外部試験の結果を見ると、R、L、W、Sそれぞれにバラつきが見られる。4技能バランスよく指導する方法を検討していく必要がある。

## 具体の取組の内容

- ・**授業と評価**:さまざまな音読活動によって英文をフレーズごとに前から意味を把握していくことに慣れさせた。キーワードを使って本文を要約させたり、音声CDを使ってDictationをさせたり、本文に関するQuestionを自分で考え、ペアの相手に質問したりする活動を取り入れた。教科書を活用して4技能を伸ばす指導を各学年で実践できた。語彙については、こまめに単語や英文法・語法のテストを行い、定着を図った。また、Speakingのパフォーマンステストを実施したり、Writingについても定期考査で英作文問題を出題したりするなどして評価した。
- ・**公開授業(11月7日)**:2、3年生のコミュニケーション英語の授業をそれぞれ公開した。コロナ禍で制約がある中での実施だったが、グループで本文の読解に取り組んだり、Dictationや本文の要約に取り組んだりする等、4技能を意識した授業を展開した。
- ・**英語外部試験**:1年生は夏休みにGTECアセスメント版を受験した。結果を学年で分析し、その後の指導に生かすことができた。また希望者対象で毎年1月に本校を準会場として英検を実施しており、今年度は1、2年生中心に240名が受験した。(昨年度は197名)。3年生の多くは大学受験で英検資格を利用するため、S-CBTや本会場での受験を個人で申し込んでいた。朝自習で英検の問題集を活用したり、授業の帯活動で面接の練習をグループで行ったりするなどしている。面接やライティングについては英語科教員が分担して指導をした。

## 成果①

### ・1年生夏休み実施GTEC(アセスメント版)結果

実施時期	今回		前回	
	20年夏(Basic)	19年夏(Basic)	20年夏(Basic)	19年夏(Basic)
Total	637.3	A1.3	647.5	A1.3
Reading	133.1	A1.3	137.8	A1.3
Listening	131.7	A1.3	147.0	A1.3
Writing	172.7	A1.3	200.6	A2.1
Speaking	191.4	A2.1	160.5	A1.3

※昨年度の1年生と比較すると、Speakingのスコアが高い

↓  
パフォーマンステストの複数回実施等で、話すことへの抵抗が少なくなった。

### ・英検受験状況(毎年1月準会場実施分)

	21年1月	20年1月	19年1月
2級受験者数	38	83	43
2級合格者数	-	23	14
準2級受験者数	186	109	149
準2級合格者数	-	33	76
3級受験者数	16	5	24
3級合格者数	-	2	15

※3年生(227名)の英検合格者数(延べ人数)  
準1級:2名 2級:55名 準2級:135名

## 成果②

・生徒はペアやグループでの活動に慣れてきたため、英語で表現することについても抵抗は少ないように見受けられる。英語が苦手な生徒にとっては、問題演習などでペアの相手と答えを確認できると安心感が生まれるようである。

・英検を受験する生徒が増加している。今年度1月に準会場を受験した生徒は、この3年間で最多となる240名だった。朝自習や普通の授業で英検対策の教材を活用したことで、より高い級を目指そうとする生徒が増えた。3年生では、今年度2名が準1級に合格した。入試で英検取得者が優遇される大学も多いため、高いモチベーションで対策学習に臨み、その結果英語力が向上した生徒も見られた。

## 今後の課題・方向性

・課題となっていた長文読解については、さまざまなテキストを使ってたくさん読ませることで、生徒も少しずつ慣れてきたように感じる。大学入学共通テストは、センター試験と比較し長文の量が増加した。目的に応じて速読と精読を使い分けたり、必要な情報を正しく把握したり、「事実」と「意見」を区別したりする力がさらに求められる。各学年の教員が工夫をしながら授業を展開しているが、今後はよい指導法を学年の枠をこえて共有したい。

・パフォーマンステストを複数回実施し、評価までするにはかなりの時間を要することが多い。実施の仕方やテストの中身、評価方法について、負担にならないように工夫していく必要がある。CAN-DOリストは、3年間を通して本校生としてどのような英語の力を身につけさせたいかを把握する際に役立てることができる。評価の際にCAN-DOリストをさらに活用できるようになれば、生徒の英語力の成長をより把握しやすくなるため、今後も継続して活用方法を検討していく。